

平成二十九年十月二十一日

豊島区立生活産業プラザ

但馬皇女・穗積皇子（十天智・天武の子女・子孫たち）

【天智の子女】

大田皇女（母は遠智娘） 天武の妃

鷗野皇女【持統】（母は遠智娘） 天武の皇后

／草壁の母

建皇子（母は遠智娘）

御名部皇女（母は姪娘） 高市の妃

／長屋王の母

阿陪皇女【元明】（母は姪娘） 草壁の妃

／文武・元正の母

飛鳥皇女（母は橘娘）

新田部皇女（母は橘娘） 天武の妃

山辺皇女（母は常陸娘） 大津の妃

大江皇女（母は色夫古娘）

川嶋皇女（母は色夫古娘）

泉皇女（母は色夫古娘）

水主皇女（母は黒媛娘）

施基皇女（母は越の道君伊羅都壳）

大友皇女（母は伊賀采女宅子娘）

【天武の子女】

草壁皇子（母は持統天皇）

大来皇女（母は大田皇女）

大津皇子（母は大田皇女）

長皇子（母は大田皇女）

弓削皇子（母は大田皇女）

舍人皇子（母は新田部皇女）

但馬皇女（母は氷上娘）

新田部皇子（母は五百重娘）

穗積皇子（母は太蕤娘）

紀皇女（母は太蕤娘）

田形皇女（母は太蕤娘）

十市皇女（母は額田姫王）

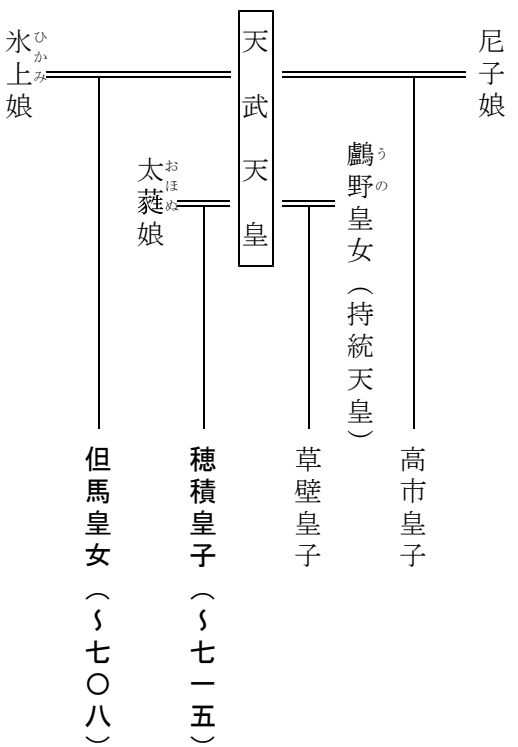
高市皇子（母は尼子娘）

忍壁皇子（母は檍媛娘）

磯城皇子（母は檍媛娘）

泊瀬部皇女（母は檍媛娘）

託基皇女（母は檍媛娘）



尼子娘

鷗野皇女（持統天皇）

高市皇子

草壁皇子

穗積皇子（715）

太蕤娘

但馬皇女（708）

氷上娘

七〇四	七〇三	七〇二	七〇一	七〇〇	六九九	六九八	六九七	六九六	六九五	六九四	六九三	六九二	六九一	六九〇	六八九	六八八	六八七	六八六	六八五	六八四	六八三	六八二	六八一	六八〇	六七九	六七八	六七七	六七六	六七五	六七四	六七三	六七二	六七一	西 曆		
慶 雲 元	三	二	大 宝 元	四	三	二	文 武 元	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二	持 統 元	朱 鳥 元	一	一	一	一	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二	天 武 元	天 智 一 〇	年 号
							文 武	持 統							天 武							天 智	天 皇													
							持 統																								先 皇					
石 上			多 治 比 島	高 市 皇 子																			執 政													
大宝律令を施行			大宝律令を制定。大伯内親王没		高市皇子没 43		藤原宮に遷都		穗積皇子、このとき浄広弑			草壁皇子没 28。草壁皇子挽歌			天武天皇没。大津皇子刑死 24			大津皇子朝政に参画 21			草壁皇子立太子 20			柿本人麻呂歌集の七夕歌			壬申の乱。飛鳥浄御原宮に遷都			天智天皇没		事 項				

七〇五	七〇六	七〇七	七〇八	七〇九	七一〇	七一一	七一二	七一三	七一四	七一五
二	三	四	元	二	三	四	五	六	七	元
			明							
麻呂	藤原 不比等									
但馬内親王没	平城京に遷都		徳積親王没							
	古事記撰進 風土記撰進の詔									

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ふ御作歌一首

a 秋の田の穂向の寄れること寄りに君に寄りなな事痛かりとも (二・一一四)

穂積皇子に 勅 して近江の志賀の山寺に遣はす時、但馬皇女の作りましし御歌一首

b 後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の阿廻に標結へわが背 (一一五)

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時、窃かに穂積皇子に接ひて、事すでに形はれて作

りましし御歌一首

c 人言を繁み言痛み己が世に未だ渡らぬ朝川渡る (一一六)

一、c 一一六番歌の解釈

従来の説

人言を繁み言痛み己が世に未だ渡らぬ朝川渡る

新説

二、b 一一五番歌の解釈

①あとに残って恋い慕っていずに、追って行って追いつきたいのです。道しるべを曲り角に結って下さい。あなた。

(日本古典文学大系『萬葉集』岩波書店 昭和三二年五月)
 ②あとに残って恋しがつてゐないで、おあとを慕って追ひついて参りませう。道のまはり角には印をおつけ下さい。吾が夫よ。

③あとに残って 恋しがっているくらいなら 追いかけて行こう 道の曲り目に 印をつけておいてくださいあなた

(日本古典文学全集『萬葉集』小学館 昭和四六年一月)
④後に一人残って恋い焦がれてなどおらずに、いつそのこと追いつがって一緒に参りましょう。道の曲り目に道しるべをつけて下さい、あなた。

(新潮日本古典集成『萬葉集』新潮社 昭和五一年一月)
⑤あとに残されて恋しがっていないで おあとを慕って追いつきましょう。道の曲り角に目じるしをして下さい。わが背よ。

(『萬葉集全注』稲岡耕二 有斐閣 昭和六〇年四月)
⑥あとに残って 恋しがっているくらいなら 追いかけて行きたい 道の曲り角に 通せんぼの縄を張っておいてくださいあなた

(新編日本古典文学全集『萬葉集』小学館 平成六年五月)
⑦あとに一人残って恋い焦がれてなんかおらずに、いつそのこと追いつがって一緒に参りましょう。道の隈の神様ごとに標を結んでお祈りをして下さい、あなた。

(『萬葉集釋注』伊藤博 集英社 平成七年一月)

三、万葉集における「しめ」の用例

1. 占有

- ① **印** 結ひてわが定めてし住吉の浜の小松は後もわが松 (三・三九四)
- ② 梅の花咲きて散りぬと人はいへどわが **標** 結ひし枝ならめやも (三・四〇〇)
- ③ 山守のありける知らにその山に **標** 結ひ立てて結ひの恥しつ (三・四〇一)
- ④ 思ひあまり甚いたもすべなみ玉襷た火の山にわれは **印** 結ふ (七・一三三五)
- ⑤ 葛城の高間の草野早領りて **標** 刺さましを今そ悔しき (七・一三三七)
- ⑥ 明日よりは春菜摘まむと **標** めし野に昨日も今日も雪は降りつつ (八・一四二七)

2. 立入禁止

- ① あかねさす紫野行き **標** 野行き野守は見ずや君が袖振る (一・二〇)
- ② ささ浪の大山守は誰がためか山に **標** 結ふ君もあらなくに (二・一五四)
- ③ 人こそはおぼにも言はめわがここだ偲ふ川原を **標** 結ふなゆめ (七・一二五二)
- ④ 祝部はふりらが斎ふ社の黄葉もみぢばも **標** 縄はな越えて散るといふものを (一〇・二三〇九)

3. 顕彰

- ① 大伴の遠つ神祖の奥津城はしるく **之** 米立よて人の知るべく (一八・四〇九六)

4. 禁足

- ① かからむの懐こころ知りせば大御船泊とてし泊りに **標** 結はましを (二・一五一)

◎問題の歌

*後れゐて恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へわが背(二・一一五)

四、万葉集における「くま」「くまみ」の用例

①味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積も
るまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の
隠さふべしや(一・一七) 額田王

②く玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十隈毎に 万た
び かへりみすれど いや遠に 里は放りぬ いや高に 山も越え来ぬく
(二・一三一) 柿本人麻呂

③く己が身し 労はしければ 玉梓の 道の隈廻に 草手折り 柴取り敷きて 床じも
の うち臥い伏して く(五・八八六) 山上憶良

五、万葉集における「ずは」の用例

A ずは B (Aを否定して、ではどうするかというとBする)

第一類

A という耐え難い状態が継続していて、そこから脱出したい(三二例)

—— (AしないでBしたかった、Bしたい)

- ①かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを(二・八六)
- ②ことしげき里に住まずは今朝鳴きし雁に副ひて往なましものを(八・一五一五)
- ③吾妹子に恋ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花にあらましを(二・一二〇)
- ④外にゐて恋ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鴨にあらましを(四・七二六)
- ⑤かくばかり恋ひつつあらずは朝に日に妹が履むらむ地にあらましを

(一一・二六九三)

⑥なかなか人にとあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ(三・三四三)

⑦験なき物を思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし(三・三三八)

⑧吾妹子に恋ひつつあらずは刈薦の思ひ乱れて死ぬべきものを(一一・二七六五)

⑨剣刀諸刃の上に行き触れて死にかも死なむ恋ひつつあらずは(一一・二六三六)

⑩住吉の津守綱引の泛子の緒の浮れか行かむ恋ひつつあらずは(一一・二六四六)

*後れゐて恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へわが背(二・一一五)

第二類

【A】は好ましい状態だが、まだ実現していない（二二例）

——（もしAしなければBすまい、Bしたい、Bしなさい）

○海の底しづく白玉風吹きて海は荒るとも取らずは止まじ（七・一三一七）

第三類

【A】が実現することは予想もできない（七例）

——（Aでもない限りBである、Bであろう）

○三輪山の山下響み行く川の水脈し絶えずは後もわが妻（二二・三〇一四）

六、但馬皇女に先立たれて

但馬皇女 薨りましし後、穗積皇子、冬の日雪の落るに、遥かに御墓を見さけまして、悲傷流涕して作りましし御歌一首

○降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに（二・二〇三）

七、卷八秋雑歌から

穗積皇子の御歌二首

①今朝の朝明雁が音聞きつ春日山黄葉にけらしわが情痛し（八・一五一三）

②秋萩は咲くべくあるらしわが屋戸の浅茅が花の散りゆく見れば（一五一四）

但馬皇女の御歌一首 一書に云はく、子部王の作なり

③ことしげき里に住まはずは今朝鳴きし雁に副ひて往なましものを 一に云はく、国にあらずは

（一五一五）

◎天智天皇の子女から

【阿閉皇女（元明天皇）】（同母妹）と【御名部皇女】（同母姉）

天皇〈元明〉の御製

①ますらをの鞆の音すなりものふの大 臣楯立つらしも（一・七六）

御名部皇女の和へ奉る御歌

②わご大君物な思ほし皇神のつぎて賜へるわれ無けなくに（一・七七）

【志貴皇子】

明日香宮より藤原宮に遷居りし後、志貴皇子の御作歌

①采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く（一・五一）

慶雲三年丙午、難波の宮に幸しし時

志貴皇子の御作歌

② 葦あし辺べ行く鴨かの羽はがひに霜しも降りて寒やまき夕ゆべは大やまと和とし思おもほゆ（一・六四）

志貴皇子のよろこび懽こころこほの御歌一首

③ 石いはばしる垂たる水みの上うへのさ蕨わらびの萌もえ出でづる春はるになりにけるかも（八・一四一八）

〈湯原王〉志貴皇子の子

湯原王、芳野よしのにて作つくる歌一首

① 吉野よしのなる夏なつ実みの河かの川かは淀よどに鴨かそ鳴なくなる山やま陰かげにして（三・三七五）

湯原王のこほろぎ蟋蟀せせりの歌一首

② 夕ゆふ月づく夜よ心こころもしのに白しろ露つゆの置おくこの庭にわに蟋蟀こほろぎ鳴なくも（八・一五五二）

湯原王の七夕の歌二首

③ 牽ひ牛ごの思おもひますらむ情こころより見みるわれ苦くるし夜よの更ふけゆけば（八・一五四四）

④ 織たな女なばたの袖そでつぐ宵よひの暁あかときは川かは瀬せの鶴たづは鳴なかずともよし（八・一五四五）

【川島皇子】

〈安貴王〉川島皇子の孫か（あるいは志貴皇子の孫）

伊勢国いせに幸いでしし時、安貴王の作つくる歌一首

① 伊勢いせの海うみの沖おきつ白しろ波なみ花はなにもが包かみて妹いもうとが家いへづとにせむ（三・三〇六）

安貴王の歌一首

② 秋あき立たちて幾いく日かもあらねばこの寝ねぬる朝あさ明けの風かぜは手た本もと寒ふしも（八・一五五五）

〈市原王〉安貴王の子

市原王の、宴うたげに父ちちの安貴王を禱ほく歌一首

① 春はる草くさは後あとはうつろふ巖いはなす常とこ磐いはに坐いませ貴たかきわが君きみ（六・九八八）

市原王の、独ひとり子を悲かなしづる歌一首

② 言こと問とはぬ木きすら妹いもうとと兄せありとふをただ独ひとり子こにあるが苦くるしさ（六・一〇〇七）

同じ月（天平十六年正月）十一日に、活道いくぢの岡おかに登のぼり、一株ひとともの松まつの下したに集あひて飲うたげする歌二首

③ 一つ松まつ幾いく代よか経へぬる吹ふく風かぜの声こゑの清きよきは年とし深ふかみかも（六・一〇四二）

右の一首は、市原王の作なり。

◎天武天皇の子女

【弓削皇子】

弓削皇子、吉野に遊しし時の御歌一首

① 滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむとわが思はなくに（三・二四二）

春日王の和へ奉る歌一首

② 王は千歳に座さむ白雲も三船の山に絶ゆる日あらめや（三・二四三）

弓削皇子の御歌一首

③ 霍公鳥無かる国にも行きてしかその鳴く声を聞けば苦しも（八・一四六七）

弓削皇子の御歌一首

④ 秋萩の上に置きたる白露の消かも死なまし恋ひつつあらずは（八・一六〇八）

【舍人皇子】

舍人皇子の御歌一首

① 大夫や片恋ひせむと嘆けども鬼の大夫なほ恋ひにけり（二・一一七）

舍人娘子、和へ奉る歌一首

② 嘆きつつ大夫の恋ふれこそわが髪結の漬ちてぬれけれ（二・一一八）

【穂積皇子】

穂積親王の御歌一首

○ 家にありし櫃に鎌刺し蔵めてし恋の奴のつかみかかりて（十六・三八一六）

右の歌一首は、穂積親王の、宴飲の日にして、酒酣なる時に、好みて斯の歌を誦して、以ちてつねの賞と為したまひき。

（広河女王）穂積皇子の孫

広河女王の歌二首 穂積皇子の孫女、上道王の女そ

① 恋草を力車に七車積みて恋ふらくわが心から（四・六九四）

② 恋は今あらじとわれは思へるを何処の恋そ掴みかかれる（四・六九五）